順天堂の最近の話題

桑原弘治*

順天堂大学図書館

順天堂大学図書館については、本誌では12巻1号18頁に表紙紹介されていますが、当時の図書館は古い建物の時代で、現在の建物の紹介は「日本医学図書館協会六十年略史」176頁が参考になります。本学の図書館は医学部図書館ですが、通称は医学部なしで、順天堂大学図書館 Juntendo University Library を使用しています。医学部図書館は、文京区本郷にあります。スポーツ健康科学部（旧体育学部）の図書館は、千葉県印旛郡印旛沼にあります。印旛郡印旛沼の図書館は、順天堂大学図書館分館と称しています。

順天堂の歴史は、江戸時代に遡りますが、大学の創設は昭和19年で、順天堂医院の歴史に比べ比較的新しく、現在の図書館にいたっては昭和51年に完成したものです。建学の精神は、順天堂の長い歴史が刻印されたものでありますが、昨今の大学の自己評価や病院の機能評価の話題とともに、検討される動きもあるようです。当然のことながら、図書館も順天堂全体のリストラと無関係ではあり得ません。図書館界に限らないことですが、第1期の評価問題は、設置基準時代の統計数値類をベースにした評価項目が多く、大学の諸活動との関係が希薄のようです。医学図書館界では、数年前からIAIMS (Integrated Advanced Information Management Systems) が話題に

なっていますが、本格的な取り組みが評価問題やネットワーク構築とともに身近な課題になりつつあります。

さて、関東地区の会合や懇談会などで当館が話題になる時、いつもきまって芋づる式に出る話があります。一つは、業務担当を3年ごとに移動していることの経験を聞かれることです。しかも、全館員がいっせいに移動することから、その長短が関心の的です。業務の機械化も引き金になっていますが、館員の中からはそれぞれの業務分担の見直しが話題になることがあります。現在は、機械化に慣れることのほうが優先していますが、どのように見直すかは先に述べた評価の問題とも関係します。また、見直し以前の大胆な業務の簡素化や再編といったことも必要になります。その点、全員が個々の業務に精通していることは長所となりますが、最近業務の機械化 (ILIS/X70) によって多少従来の流れを変えつつあるようです。これは機械化の利点ですが、直面している日々の業務を処理することと業務をシステム化するという意図は、議論の集中するところですが、とりあえずは、採用したシステムの流れに添うことですが、中長期の課題としては、機械化の先を展望することが、簡素化や再編に必要な基礎になると考えられます。展望することの例として、評価項目として日々の業務を単なる作業、労働という位置づけから専門職にふさわしい再編が可能かどうか、また医学部の学生に講義可能な業務に再編できるか

*Koji KUWAHARA : 〒113 東京都文京区本郷 2-2-26.

(1995年1月26日 受理)

どうか、といったことが考えられます。

二つ目の話題は、昨年 Biological Abstracts と Chemical Abstracts を廃棄処分したことです。当館では、数年前にも索引・抄録誌を大量に廃棄処分しましたが、今回は資産上の金額も多く、教授会などの抵抗も予想されましたが無事終了しました。幸い、理工系の学部図書館に寄贈することができ安堵しています。廃棄処分は、書架スペースを維持するための苦肉の対処療法ですが、すでに次の処分を検討せざるを得ません。一方で、倉庫会社や共同保存の検討も進めていますが、今のところ廃棄処分という“とかげのしっぽ切り”しか手立てがありません。図書館員にとっては、重大な選択ですが、電子図書館の完成までの、あるいは国レベルの Biblio Bank 成立までの過渡的な出血と認識しています。この問題については、ザナドウからハイパーテキストへ、ペーパーレス時代の図書館、図書館を越えて beyond the library wall, といった 21 世紀につながるテーマとも無関係ではありません。また、文献の評価, filtering medical literature といったテーマとも関連した壮大なスケールでもあります。

三つ目の話題は、「学校法人順天堂規約集」に関することです。順天堂では、司書は技術職に組み入れられています。「給与（本給）基準表」によると、臨床検査技師や薬剤師などと同じ欄に位置し、一般事務職とは別立てになっています。もっとも、事務職で技術職手当がつく場合とどの程度の差があるかは不明です。また、技術職には一般職のような肩書きが安定していないこと、逆に人事移動などによる図書館以外の業務に携わるといった事態は少ないことなどが思い当たります。先の評価問題や大学のリストラが進めば、このような従来の肩書きや縦割り組織なども検討されることになるかもしれません。次に、「順天堂大学学

則」第 17 節 59 条第 5 項には、「図書館長及び分館長は、教授もしくは事務員をもって充て、学長これを任免する」とあります。この「事務員をもって」という箇所は、過去に図書館学の渡辺正亥氏が専門職で当館の館長に就任された経緯がありますが、文言上「事務員」という言葉が気になるところです。しかしながら、この種の文言は他大学の規約集には見られないのではないのでしょうか。

以上述べた話題と関連しますが、当館内部の話題として次のようなことがあります。① 書架スペースについては、大学紀要類の廃棄処分、Excerpta Medica の扱い、② 夜間開館の延長とアルバイトの確保、③ 視聴覚資料の予算を教務課から図書館に移行し、積極的な収集を始めるかどうか、④ サイン計画、ただし予算化困難、⑤ 学生、教職員などに対する図書館独自のオリエンテーションの計画、⑥ 単年度ごとの事業計画の作成と中長期計画の作成、⑦ 閲覧その他の業務の機械化は進んでいるが、どこまで進めるか、また相互利用の機械化をどのように始めるか、⑧ 図書館に關係する規約類の見直し、⑨ 大学のネットワーク構想にどのように対処するか、これに関連して人材の育成、補充を検討する、⑩ 館報類などの広報誌の計画、ただし DTP 時代に合った作成計画、したがって④のサイン計画とも関連するが、パソコンによるメニュー画面やマンガ画面などを作成するためのソフト類の充実、⑪ 業務の機械化の流れは、分館や分室（関連病院など 4 カ所）といった関連部署とどのような関係を築くか、ネットワーク時代の集中と分散、等々思いつくままに列挙しましたが、館内でアンケートすればもっと続くと考えられます。ここに述べた話題が実行された際には、本紙に投稿するよう努力するつもりであります。